様式Ｃ―１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：24102
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22530562
研究課題名（和文） 発達障害の療育現場における相互行為の構造：エスノメソドロジー・会話分析による解明
研究課題名（英文） Interactional structures of therapeutic settings for developmental disorder: An ethnomethodological explication

研究代表者
浦野　茂（SHIGERU URANO）
三重県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80347830

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、発達障害者（とりわけ広汎性発達障害の小学生高学年の児童）の療育場面の相互行為の構造を、社会生活技能訓練（SST）を事例としながら、エスノメソドロジー・会話分析の手法によって解明することである。この結果、次が明らかになった。(1)療育場面は、児童の積極的参加を不可欠な資源とした相互行為として構成されている。(2)療育場面の相互行為の中心的部分は、参加者の行為上の問題を積極的に可視的にする技術と、それによって可視化された問題に対して参加者が療育者とともに修復していく実践から、成り立っている。(3)療育場面は、一方で児童の積極的な参加に依拠しながらも、他方でその行為を問題の顕れと修復の実行という観点のもとで療育者によって受け止められていくという、強い制約をもつ。したがって今後の課題は、こうした制約から自由な、発達障害者への支援実践について検討することとなる。

研究成果の概要（英文）: The aim of this research is to explicate interactional structures of social skills training (SST) for children (in their early teens) with developmental disorder. The results of the research are as follows: (1) the training setting of SST is an interactional event that is collaboratively constituted by the session leader and the children, (2) the main part of the SST session consists of the techniques that make observable the problems of children's action, and of the practices that repair these problems, (3) the training setting of SST strongly constrains the children's way of participating in the interaction. Therefore, the future task is to examine the method of support practice that is free from these constraints.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：エスノメソドロジー・発達障害・自閉症スペクトラム障害・社会生活技能訓練

１．研究開始当初の背景

医療社会学および逸脱の社会学は、社会の医療化という標語のもと、社会における道徳的現象が医療制度のもとに置かれていく問

題について数多く指摘してきた。そして社会学者 P. コンラッドがかつて多動症児について指摘したように、発達障害者が置かれている状況は、社会の医療化の端的な顕れである。したがって発達障害者の療育場面の社会学的研究は、現代社会研究として不可欠である。

しかしこれまでの社会学的研究では、発達障害者支援法および特別支援教育を中心とした法的・教育制度上の枠組みの変化についての記述・分析を中心としており、発達障害者を取り囲む現実の相互行為とその中における自己認識のあり方についての研究は未着手の状態に止まっていた。ちなみにこのような欠如は、社会の医療化がマクロ社会レベルの法的・制度的変化にとどまらず日常生活における実践と経験の変化である点をふまえるならば、埋められなければならない欠如である。

以上が、本研究を開始するにあたって念頭に置いていた事柄である。

２．研究の目的

上記の問題認識にもとづき、本研究は、発達障害者の療育場面について、その実際の相互行為の構造を詳細に分析することを目的とした。具体的な対象としては、広汎性発達障害（自閉症スペクトラム障害）の児童に向けて実施されている社会生活技能訓練（以下、SST とする）の場面とし、このなかで療育者と参加児童によって織りなされている相互行為の構造をエスノメソドロジー・会話分析の手法によりながら解明することを具体的目的に設定した。

こうした解明を通じ、本研究がめざしたのは次である。第一に、広汎性発達障害をもつ児童や人びとにする療育や支援などの制度的実践がそのうえに成立している基本的な概念的前提を明確化すること。第二に、こうした制度的実践が、広汎性発達障害をもつ児童や人びと児童にいかなる自己経験の可能性と制約とを与えているのかを明らかにすること。

３．研究の方法

本研究の基本的なアイデアは、広汎性発達障害を障害学における「ディスアビリティ(disability)」の次元において捉える点にある。これにもとづくならば、広汎性発達障害とは、具体的な社会的状況のなかにおいて、またその特定のあり方として存在する社会的現象であると捉えることができる。そしてこの視点に立つことによって、療育場面の相互行為の構造の特徴として広汎性発達障害の概念を捉え直すことが可能になる。以下、それぞれについて説明する。

(1)本研究ではまず、広汎性発達障害についての認知心理学的研究の批判的検討を通じ、発達障害についての上記の視点を明確にすることを試みた。

(2)そのうえで、SST 場面の録音・録画をデータとしながら、その中心的場面の一つであるロールプレイ場面の相互行為の構造についてエスノメソドロジー・会話分析の方法にもとづく解明を行った。

４．研究成果

本研究の研究成果は、大別すると次の二つになる。(1)広汎性発達障害についての認知心理学的研究にそなわる概念的問題の明確化。(2)広汎性発達障害児に対する SST 場面の相互行為的構造の解明。以下、それぞれについて説明する。

(1)本研究はまず、広汎性発達障害の中核的障害についての既存の研究を検討した。検討対象は「心の理論アプローチ」と呼ばれる、人間の社会的コミュニケーション、なかでも他者理解の問題をめぐる説明のアプローチである。そしてこのアプローチは、広汎性発達障害の基本障害を説明するものとしても援用されてきた経緯がある。

心の理論アプローチとは、人間が自己や他者を心ある存在として捉え、その心的状態によって行為を理解し予測する能力を、個々の人間がもつとされる「心の理論」と呼ばれる機構によって説明するアプローチの総称である。なお、この「心の理論」が何であるかについては様々な立場がある。しかしいずれの立場も、心の理論について、それが観察可能な振る舞いに対して心的状態による説明を提供する機能を持つものと捉えている点は、同様である。

このアプローチの出発点にあるのは、D. プレマックと G. ウッドラフによる研究である。彼らは、チンパンジーに人間の行動を予測させる課題を行わせる実験を行い、結果としてチンパンジーには他の個体や人間の行動を意図などの心的状態にもとづいて予測する能力を持っていると主張した。この研究の延長線上に、S. バロン=コーヘンらによる広汎性発達障害（自閉症）をめぐる研究がある。彼らは、広汎性発達障害児に指摘される社会性の障害は心の理論の欠如によって説明されるべきであると主張した。したがって彼らによると、広汎性発達障害の基本障害と

は心の理論の障害であり、この結果として広汎性発達障害児の社会性の障害があるということになる。

彼らの議論については、実験方法やデータ解釈をめぐる問題や、仮説の妥当性をめぐる問題の指摘はたびたびなされてきた。他方、このような経験的問題とは別に、その仮説を構成している基礎的概念についても問題を指摘することができる。ごく大まかに述べると、問題は二点ある。

①第一は、他者理解についてのメンタリズム的想定である。このアプローチは、他者理解という現象一般を、一種の理論的な推論によって獲得されるものとして捉えている。すなわち、直接に観察できるのは他者の身体のみであり、その意味（意図や動機）は個々人のもつ心の理論による推論を通じて初めて獲得されるということになる。この捉え方においては、具体的社会状況のなかで、それに依拠しながら成し遂げられる現実の他者理解は、もっぱら個々人の認知的機構の働きによるものとして還元的に捉えられていく。言い換えるならば、個々人の間につねに存在し、現実の他者理解における資源として働いている状況的要素――社会的場面や社会関係、規範など――の介在が、見失われることになる。

②以上から得られるのは、広汎性発達障害についての個体主義的な把握という第二の問題である。かりに上記のように他者理解が個々人のもつ心の理論という認知的機構によるとすれば、反対に他者理解にまつわる問題は個々人の認知的機構の障害によるものと捉えられることになるだろう。この結果、個人に障害が帰属される際の背景となっている様々な状況的要素が視野から抜け落ちていくことになる。

広汎性発達障害児者について指摘されている社会性の障害とは、文字通り、個人と個人の間に存在している障害である。言い換えるならばこの障害は、まず個々人の関係のあり方として現れ、観察されるものとして存在する。したがって個人と個人の間に介在し、これを構成している状況的要素は、この障害の概念が意味あるものとして成立するためのいわば条件となっていると言える。しかしながら心の理論アプローチによる広汎性発達障害理解は、障害を特定個人に内在する障害として捉えていくため、この状況的要素に正当な注意を払うことができない。こうしてこのアプローチは、広汎性発達障害児者と呼ばれる人びとの側にもっぱら適応的努力を強いるという含意をも持つことになる。こうした問題を踏まえながら、広汎性発達障害児者をめぐる社会関係とその組み替えについて考えていくにあたっては、広汎性発達障害をほかでもなく障害として成立させる際に介在している状況的要素に注目していくことが、必要となる。

上記二点が、先行研究の検討から得られた成果である。

(2) 上記の検討により得られた視点にもとづき、本研究は、広汎性発達障害をもつ児童（小学生高学年）に対しておこなわれた SST におけるロールプレイ場面を対象とし、その相互行為的構造をエスノメソドロジー・会話分析の手法にもとづき、解明を行った。成果として、以下の三点が得られた。

①第一は、広汎性発達障害をもつ児童の相互行為能力についてである。SST のロールプレイにおいて自閉症スペクトラムをもつ参加児童はしばしば、リーダー（療育者）によるプロンプティングと呼ばれる支援を通じて自らの発話を産出していく。つまり児童は、リーダーによる支援を受け、そのなかでインストラクションを受けながら、発話を産出していくことができている。この意味において、SST のロールプレイは、児童の発話産出に関する能力上の問題が観察可能になるようにデザインされている。そして実際、このようなデザインにもとづいて、こうした問題が児童に対して帰属されていくことになる。この点にもとづくならば、SST は一方において、広汎性発達障害をもつ参加者の問題を積極的に観察可能なものにするひとつの技術であると言うことができる。

②しかし第二に、上記で確認したように、このような問題にもとづいて行われるリーダーによる支援じたいが、相互行為的に実現されている。言い換えるならば、リーダーによって提起されたプロンプティングの行為に対し、児童はそれに「応答」するのでなく「従う」という仕方で、適切に対応していくことによって、このような支援が成し遂げられているのである。たしかに、リーダーによる支援は児童の発話産出の能力の問題にもとづき、またそれをきっかけに行われている。しかしそれにもかかわらず、このリーダーによる支援がまさに支援として実現されるのは、逆説的ながら、児童の相互行為的能力に依拠しているのである。

③これらの二点を踏まえるならば、第三に、広汎性発達障害をもつ人びとの特徴として指摘される社会性の障害という特徴について、再検討の必要のあることが示唆される。上記(1)において検討した心の理論アプローチは、広汎性発達障害を脳神経系に原因をも

つ認知的な障害として捉えていた。したがってこの場合における障害とは、個人の身体と心理にそなわる特徴として定義されている。しかし上記の解明にもとづくならば、ある個人が相互行為に関わる障害をもつという事実それじたいが、具体的社会状況を不可欠な前提として、成立していると言うことができる。また同様に、この障害に対する支援の試みがそれとして成し遂げられるのは、支援の対象となる人びとによる相互行為への参与を通してである。障害をもつとされる個人のこのような相互行為への参与ぬきには、支援の営みは成立し得ないということでもある。

上記三点が、エスノメソドロジー・会話分析による解明から得られた論点である。

本研究は、広汎性発達障害のための療育場面をおもな対象として行ってきた。しかし、発達障害児者の生活上の困難は、障害児者当人を一部として含む社会関係のあり方の問題に由来しており、したがって障害者個人の技能の問題に還元することは決してできない。したがって発達障害児者に対して適応的な働きかけを行う療育の実践は、この人びとのための生活支援の一方法としての意義は認められるものの、それだけで十全なものでは決してありえない。この点を踏まえ、今後は、療育的働きかけ以外のかたちで営まれている発達障害者への支援実践について――たとえばピアサポートと当事者研究について――その相互行為的構造を明らかにすることを、課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 水川喜文・中村和生・浦野　茂, 2013,「社会生活技能訓練におけるカテゴリーと社会秩序――自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー」『保健医療社会学論集』24(1), 査読終了・印刷中, 査読あり.
② 中村和生・浦野　茂・水川喜文, 2013,「「心の理論」と社会的場面の理解可能性――　自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジーにむけて」『年報社会学論集』26, 査読終了・印刷中, 査読あり.
③ 浦野　茂・水川喜文・中村和生, 2012,「社会生活技能訓練における発話の共同産出――広汎性発達障害児への療育場面のエスノメソドロジー」『三重県立看護大学紀要』16, 1-10, 査読あり, http://www.mcn.ac.jp/hpdata/_images/Media/campus/kiyou16_P01-P10.pdf

〔学会発表〕（計７件）

① 中村和生,「ポスト分析的エスノメソドロジーの可能性」, エスノメソドロジー・会話分析研究会, 2012 年度秋の研究大会, 2012 年 11 月 2 日, 北星学園大学.
② 浦野　茂,「社会生活技能訓練場面における発達障害――エスノメソドロジー的記述の試み」, 共生のための国際哲学研究センター共生のための哲学研究会第 5 回研究会, 2012 年 9 月 13 日, 東京大学駒場キャンパス.
③ 中村和生,「科学実践への社会学的アプローチ」, 応用哲学会第 4 回年次研究大会, 2012 年 4 月 22 日, 千葉大学.
④ 中村和生・浦野　茂・水川喜文,「「心の理論」と社会的場面の理解可能性――自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー(1)」, 第 84 回日本社会学会大会, 2011 年 9 月 17 日, 関西大学.
⑤ 水川喜文・中村和生・浦野　茂,「社会生活技能訓練におけるカテゴリーと社会秩序――自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー(2)」, 第 84 回日本社会学会大会, 2011 年 9 月 17 日, 関西大学.
⑥ 浦野　茂・水川喜文・中村和生,「社会生活技能訓練における発話の共同産出――自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー(3)」, 第 84 回日本社会学会大会, 2011 年 9 月 17 日, 関西大学.
⑦ Shigeru Urano, Yoshifumi Mizukawa, Kazuo Nakamura, “Co-production of utterances in social skills training for children with autistic spectrum disorder,” 10th Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis, July 13, 2011, Fribourg University, Switzerland.

６．研究組織

(1)研究代表者
浦野　茂（SHIGERU URANO）
三重県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80347830
(2)研究分担者
水川　喜文（YOSHIFUMI MIZUKAWA）
北星学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：202999738

中村　和生（KAZUO NAKAMURA）
青森大学・社会学部・准教授
研究者番号：70584879